

わが国の近郊都市における地域景観資源に関する研究 —「八千代台フォトコンテスト」応募写真の空間分析および画像解析を通して—

指導教員 岡田 智秀, 栗本 賢一

高木 孝太郎, 山本 拓叶

1. 研究目的；高度経済成長期を契機に発展したわが国の近郊都市は、半世紀以上が経過し、都市施設の老朽化や少子高齢化に伴う地域活力の減退が深刻化している。その典型である千葉県八千代市の八千代台地区（図1）は、住宅団地発祥の地として知られるが、ベッドタウンとしての性格が強く、著名な観光資源を有しない、いわゆる「特徴を見出しにくい普通のまち」となっている。こうした地域の再生にあたっては、住民が日常的に価値を見出している潜在的景観資源を発掘し、それらをかした景観まちづくりが重要となる。

そこで本研究では、同地区における地域景観資源を発掘するため、住民の視点が直接反映される「八千代台フォトコンテスト」の全応募写真 369 件を分析対象とし、空間分析および撮影距離に基づく構造解析を行うことにより、近郊都市における地域景観資源の特性について、明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法；本稿では、表 1 に示す調査を実施した。

3. 結果および考察；表 2 に応募作品の主対象と撮影距離の関係を示すクロス集計結果を、図2にGISを用いた主対象の撮影地点（集積実態）と代表写真（写真1～12）を示す。また、表 3 は、受賞作品 60 件の主対象と年度別頻度を示したものである。以降は各項目の特徴について詳述する。

(1) 応募写真からみる地域景観資源の実態把握；本項では、応募作品の主対象を 20 要素に分類し、これらを 6 項目（空模様、自然、市街地、動体物、社会基盤、文化・教育施設）に類型化した表 2 を対象に、主対象と撮影地点の距離関係および空間分布状況より、地域景観資源の特徴について明らかにする。

1) **空模様 (99 件)**；表 2 より、本項目は全 369 件中 99 件 (27%) と最多頻度を占めた。全事例が 1,200m 以上の「遠景」で撮影されており、なかでも「夕景」が 99

件中 56 件 (57%) と過半を占めた。これは、特定のランドマークではなく、近郊都市特有の低層建物のスカイラインや街並みを背景とした一日の終わりを象徴する空の変化等、天空の動的変化が高く評価されていることを示している（写真 1）。図 2 より、これらの撮影地点は「①八千代台駅」西口歩道橋や、地区最高層の商業施設「②ユアエルム」屋上など、周囲より高い視点場に顕著な集積がみられた。これは、土地利用が稠密な近郊都市において、水平視域を確保しうる高所視点場が日常景観を享受する上で重要な要件であることを示唆していよう。大都市の駅周辺と比較して、駅前広場整備によって高い天空率が保全され、ゆとりある空の広がりを感じられる環境が形成されている実態を捉えたものである。

以上より、本地区における「空模様」の景観は、高所視点による一望性と広場空間の天空に対するゆとりが相互作用し、既成市街地の中に視覚的な余白を生み出す「開放性」により高く評価されていることが明らかとなった。

2) **自然 (85 件)**；表 2 より、本項目は全 369 件中 85 件 (23%) を占め、2 番目に高い頻度を示した。撮影距離は 150m 以内の「近景～中景」に集中している。内訳をみると、「公園植物 (56 件)」は 25m 程度の中距離で撮影される傾向にあり、図2および写真3に示す通り、桜や紅葉といった季節性の高い高木が、住民の憩いの場となる公園内に立地していることに起因する。すなわち、公園内の植栽（高木）は周囲から一定の視距離を保って眺められることで全体が視認でき、「ランドマーク性」が創出されているといえよう。対して、「沿道植物 (29 件)」は、1m 以内の至近距離から捉えられて

表 1 調査概要

項目	概要
調査期間	2021年7月22日(木)～2025年7月31日(木)
調査対象	千葉県八千代市八千代台地区で開催された「八千代台フォトコンテスト」全5回(2021～2025年)の応募写真全369件 (第1回:55件,第2回:50件,第3回:78件,第4回:90件,第5回:96件)
募集テーマ	八千代台の時代と風景を残そう ～写真で彩り八千代台地域の東西をつなぐ～
調査内容	1) 被写体を「主対象」として 20 要素に分類し、全 6 大項目（「空模様」「自然」「市街地」「動体物」「社会基盤」「文化・教育施設」）へ類型化することで、住民が価値を見出す地域景観資源の内容を定量的に把握。 2) 被写体と撮影地点の距離関係から、撮影距離（近景・中景・遠景など）を算出・解析。 3) 全写真の撮影地点を GIS（地理情報システム）上で特定し、景観資源の空間的な利用実態を分析（図2）。 4) 全60点の受賞作品を対象に、景観構成要素の組み合わせおよび空間分布の相関から、景観成立の工学的要件を導出。



図 1 研究対象地域図（八千代台地区）

おり、主な撮影地点は通勤・通学等の主要導線となっている「①八千代台駅」東口や「③エポラ通り」である(写真 4)。これは、ランドマークとなる高木ではなく、単調になりがちな生活道路において、足元の植栽(小さな草花)が視覚的な変化をもたらす「アクセント」として評価されていることを示している。

以上より、本地区における自然資源は、身体的距離に応じて異なる景観価値を住民に提供している。広がりある公園空間における象徴的な植栽が「一望される景観の核」として機能する一方、生活動線上の足元の小さな植栽は「歩行空間の質を補完する微細な装飾」として評価されており、この視距離の差異に基づいた多層的な評価構造が、近郊都市における自然景観の評価要因であることを明らかにした。

3) 市街地 (83 件) ; 表 2 より、本項目は全 369 件中 83 件 (22%) を占め、3 番目に高い頻度で確認された。内訳は「街並み (56 件)」「公園 (遊具) (15 件)」「ユアエルム (6 件)」「公園 (オブジェ) (6 件)」である。撮影距離は、「街並み」において近中景が 56 件中 25 件 (45%) と約半数を占め、前項「自然」と比較して、低層住宅群や歩道沿いの連続植栽、生垣を伴う住宅地景観など、広がりのある街路景観を構成する物理的要素が明瞭に識別可能な 150m 以内の距離で撮影される傾向にある(写真 5)。図 2 より、撮影地点は「①八千代台駅」周辺および「③エポラ通り」を中心に線状に集積しており、街路の直線性と壁面線の整列(D/H 比の安定)が生む視線の抜けと奥行き感が、日常空間にお

ける「一望性」を担保している状況である。加えて、「公園 (オブジェ)」や象徴的施設「ユアエルム」を主対象とした写真も確認され、市街地内の多様な生活空間が撮影対象となっている実態が捉えられた(写真 6)。

以上より、本地区で評価される市街地景観は、稠密な市街地にあっても、駅へ向かう直線的な道路軸(エポラ通り)が連続的なパースペクティブを形成し、地区特有の奥行き感を生み出している点に特徴がある。

4) 動体物 (44 件) ; 表 2 より、本項目は全 369 件中 44 件 (12%) を占め、「生物 (20 件)」や「人物 (20 件)」等のマイクロな対象が 5m 以内の至近距離で評価されている。内容として、「ユアエルム」内の水族館や、散歩中のペット等住民の極めて身近な生活圏における生命の営みが評価されている(写真 7)。特筆すべきは、図 2 より、「③エポラ通り」において北西部の「⑤習志野駐屯地」に由来する「落下傘 (4 件)」が撮影されている点である(写真 8)。これは、駅へと向かう直線的な道路軸とその両側の建物高さの統一によって確保された開放的な視域が、上空に出現する地域固有の動的現象を視認可能としている空間的特徴によるものである。

以上より、本地区では日常的な生活空間に介在する微細な生命感に加え、都市形状に担保された視覚的なゆとりが、一時的・非日常的な躍動感を景観資源へと昇華させる「躍動性」を有していることを明らかにした。これは、既成市街地において「空」という余白を計画的に保全することが、偶発的な当該事象をアイス トップへと変容させる要件であることを示唆している。

表 2 応募作品の分析 [筆者作成]

主対象	撮影距離	撮影距離										合計 件数
		近景 1	近景 2	近景 3	近景 4	近景 5	近中景	中景	中遠景	遠景		
空模様 (99 件 : 27%)	夕景	-	-	-	-	-	-	-	-	-	56	56(57%)
	青空	-	-	-	-	-	-	-	-	-	16	16(16%)
	朝焼け	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12	12(12%)
	夜空	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	5(5%)
	虹	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	4(4%)
	曇り空	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	4(4%)
	雪	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2(2%)
小計										99	99(100%)	
自然 (85 件 : 23%)	公園植物	8	5	7	14	16	6					56(66%)
	沿道植物	16	5	3	3	1	1					29(34%)
	小計	24	10	10	17	17	7					85(100%)
市街地 (83 件 : 22%)	街並み	1	1	3	8	12	25	3	2	1		56(67%)
	公園 (遊具)	-	1	3	4	6	1	-	-	-		15(18%)
	ユアエルム	-	-	-	1	3	2	-	-	-		6(7%)
	公園 (オブジェ)	-	1	2	2	1	-	-	-	-		6(7%)
	小計	1	3	8	15	22	28	3	2	1		83(100%)
	動物物 (44 件 : 12%)	生物	16	1	2	1	-	-	-	-	-	
人物	3	11	5	-	1	-	-	-	-	-		20(45%)
落下傘	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4		4(10%)
小計	19	12	7	1	1	-	-	-	-	4		44(100%)
社会基盤 (26 件 : 7%)	駅・電車	1	2	2	5	7	1	1	-	-		19(73%)
	道路・歩道橋	-	-	1	2	2	1	1	-	-		7(27%)
	小計	1	2	3	7	9	2	2	-	-		26(100%)
文化・教育施設 (11 件 : 3%)	諏訪神社	-	-	2	4	2	-	-	-	-		8(73%)
	学校	-	-	-	-	1	2	-	-	-		3(27%)
	小計	-	-	2	4	3	2	-	-	-		11(100%)
その他 (21 件 : 6%)												21(100%)
合計	55	30	33	47	54	39	5	2	104		369	

[凡例] □ : 本文記載事項, () : 割合, 空白 : 0 件, □ : 0~4 件, □ : 5~9 件, □ : 10~14 件, □ : 15~19 件, □ : 20~24 件, □ : 25 件~/近景 1 : 0~1m, 近景 2 : ~2m, 近景 3 : ~5m, 近景 4 : ~10m, 近景 5 : ~25m, 近中景 : ~150m, 中景 : ~600m, 中遠景 : ~1,200m, 遠景 : 1,200m~

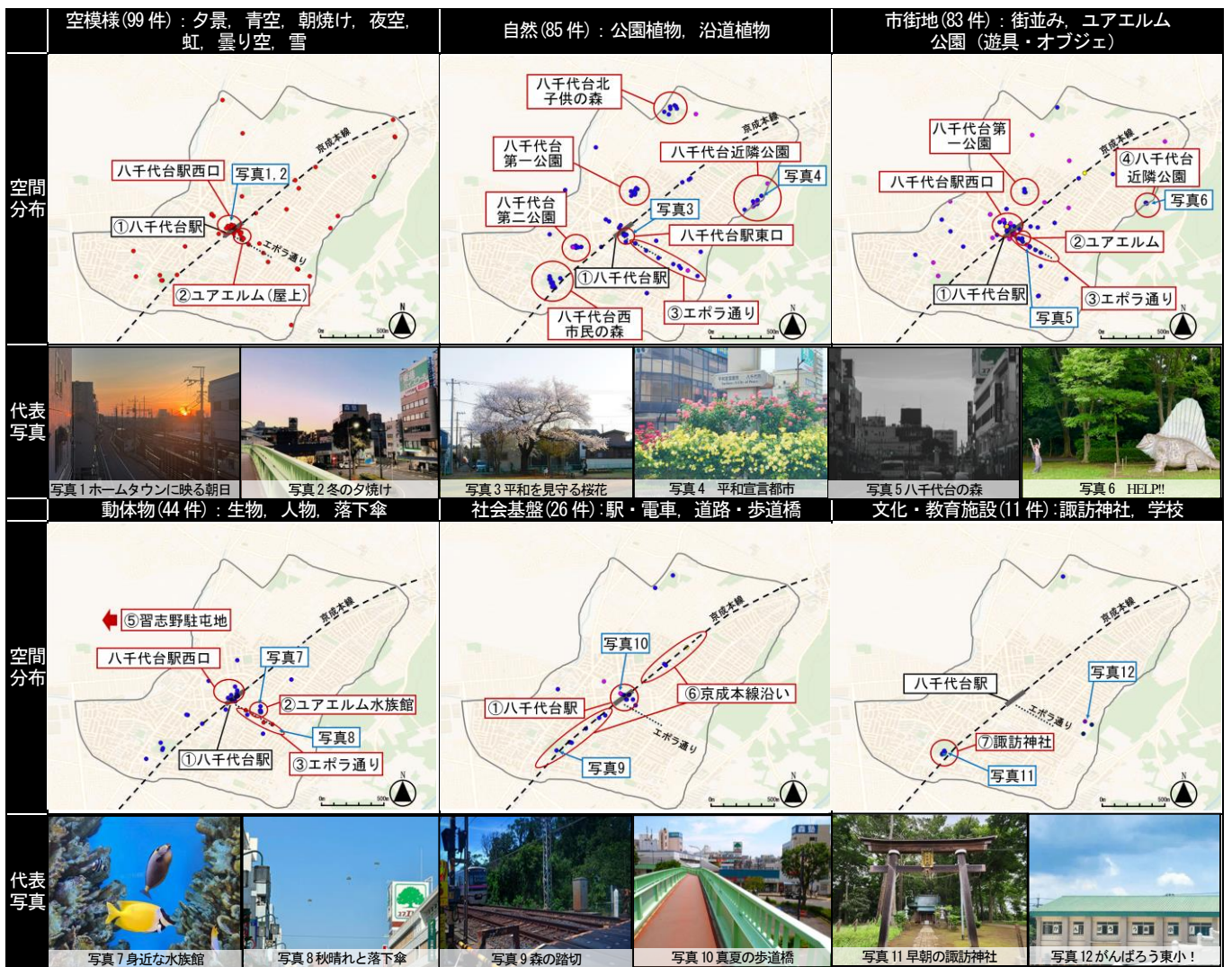
5) **社会基盤 (26 件)**; 表 2 より, 本項目は全 369 件中 26 件 (7%) を占め, 2 番目に少ない頻度であり, 「駅・電車 (19 件)」「道路・歩道橋 (7 件)」で構成されている。撮影距離は 25m までの中近景域が大半を占め, 被写体との物理的距離の近さが最大の特徴である。具体的には, 図 2 より, 「①八千代台駅」や「⑥京成本線沿い」での鉄道施設が, 住民の日常的生活空間における近景として評価されている (写真 9)。これは, 均質な低層住宅地を貫通する鉄道の異質なスケールが, 単調な住環境の中に場所性を強調する装置として機能し, 景観資源としての「意外性」を提供していると考えられる。加えて, 歩道橋上からの同一対象の俯瞰的な構図も確認され, 高低差を伴う構造物景観の立体的な多様性が評価されていることを示していよう (写真 10)。

以上より, 本地区における社会基盤施設は, 生活空間内の近景として認識される鉄道の異質性と, 視点場の高低差が生む空間的立体性が相乗的に作用すること

で, 地域景観資源としての価値「意外性」を形成していると考えられる。

6) **文化・教育施設 (11 件)**; 表 2 より, 本項目は全 369 件中 11 件 (3%) と最少頻度であった。撮影距離は 150m 以内の「近景~近中景」に集積し, 被写体の構造や質感を明瞭に識別可能なスケールで捉えられている。内訳は, 八千代台西市民の森に位置する「諏訪神社」が 11 件中 8 件 (73%) と卓越している (写真 11)。これは, 当地区の基調を成す密集住宅地の「日常」の空間の中に, 緑地に包まれた神社の崇高な「非日常」の空間が対比的に存在している状況を示す (図 2)。すなわち, このような日常と非日常の差異が生む「対称性」が評価されたと考えられる。一方, 「学校」を対象とした写真も確認され, 通学路や校舎外観といった住民の日々の日常風景を評価されている (写真 12)。

以上より, 本地区における文化・教育施設は, 住宅地内の日常の風景とその中に有する非日常との「対称



[凡例] ●: 近景, ●: 近中景, ●: 中景, ●: 中遠景, ●: 遠景, ○: 本文記載事項(集積), □: 代表写真の撮影地, —: 路線, - - -: 対象地(八千代台地区)
 図 2 主対象 6 大項目の空間分布と代表写真

性」が評価される実態を明らかにした。

(2) 受賞作品からみる地域景観資源の内容の分析；本項では、全 5 回の開催において選出された受賞作品 60 件を分析対象とし、主対象および撮影地の空間分析を通じて、優れた地域景観資源の特性を明らかにする。

1) 受賞作品の主対象からみた地域景観資源の分析；表 3 より、受賞作品においても「夕景」が 16 件 (27%) と最大頻度を示し、季節や場所に依存しない普遍的な景観資源であることを捉えた。次いで「公園植物」が 10 件 (17%) と多く、「桜とブランコ (写真 14)」のように、遊具という生活要素と季節的な自然要素が高い評価を得ている。また、三番目に多い「街並み」7 件 (12%) は、写真 15 に示すように、日常的な生活圏における空の動的变化を主題としており、近郊都市特有の低層なスカイラインが住民の視覚的充足を支える重要な景観資源として機能している実態を捉えた。

以上より、受賞作品の評価傾向は、特定の観光的対象物ではなく、老若男女が等しく享受可能な「日常生活の中の何気ない瞬間」の資源化に集約される。

2) 受賞作品の分布状況からみる地域景観資源の分析；表 3 より、受賞作品の空間分布実態は「八千代台駅」を中心とした「エポラ通り」の街路軸沿いへの集積、および地区内に点在する公園への分布を確認した。このような集積は、駅周辺や主要動線が形成する直線的な街路軸と奥行き感に起因し、これらの地点は住民の通勤・通学の日常的な生活行動の場となっている。特に、低層住居専用地域を主とする建築高さの抑制により、一貫して開放的な視域（空の広がり）が確保されており、こうした「空模様」を内包した景観が地域景観資源として高く評価されたことが示唆される。また、公園における受賞作品は、植物や遊具、高木といった季節性や滞留性を伴う景観要素を対象とする傾向が顕著であり、公園空間が住民の憩いの場として機能するだけでなく、人々の営みと自然要素が融合した情景が地域固有の景観の重要な核として認識されていることを示している。

以上の分析結果より、本地区における価値ある景観資源は、特定の観光的名所に限定されるものではなく、駅周辺や生活主要動線、公園といった住民の日常生活空間の中に内在していることが明らかとなった。すなわち、近郊都市として形成された既成市街地において、空の動的变化や季節性、そして滞留を伴う人々の営みと密接に結びついた「住民の生活視点に寄り添う何気ない風景」こそが、地域住民が興味・関心を寄せる景観的価値を有していると考えられる。

4. まとめ；本研究では、近郊都市・八千代台地区に

おける「八千代台フォトコンテスト」の応募写真全 369 件の分析を通じ、いわゆる「特徴を見出しにくい普通のまち」における地域景観資源の空間特性を明らかにした。分析の結果、①駅前広場の「開放性」、②直線道路の「一望性」、③公園の「ランドマーク性」、④沿道植物の「アクセント」、⑤都市の余白（空）に現れる地域事象を資源化する「躍動性」、⑥近景で捉えられる鉄道施設の「意外性」、⑦周辺住宅地と厳かな神社・森との「対称性」の 7 特性を導出した。

謝辞；本研究において、ご協力いただいた「八千代台まちづくり合同会社」の皆様および当時大学院 2 年の常松美咲様に厚く御礼申し上げます。
参考文献；1)八千代台フォトコンテスト：https://photocontest.yachiyodai-machi-llc.com/2024-2(最終閲覧日:2026.1.26) / 2)京葉銀行 HP：https://www.keiyobank.co.jp/sustainability/social/contribution/Information_magazine/nihonichi/pdf/Nippon04.pdf (最終閲覧日:2026.1.26)

表 3 受賞作品の分析 [筆者作成]

主対象	実施回	実施回					受賞/総数 (%)
		①	②	③	④	⑤	
空模様	夕景	2	2	3	4	5	16(27%)
	青空	-	-	1	-	-	1(2%)
	朝焼け	-	-	2	1	-	3(5%)
	夜空	-	-	-	-	-	-
	虹	-	-	-	-	1	1(2%)
	曇り空	-	-	-	-	-	-
	雪	-	-	-	-	-	-
小計	2	2	6	5	6	21(36%)	
自然	公園植物	-	2	2	4	2	10(17%)
	沿道植物	-	1	1	1	2	5(8%)
	小計	-	3	3	5	4	15(25%)
市街地	街並み	3	1	2	-	1	7(12%)
	公園(遊具)	-	2	-	-	-	2(3%)
	ユアエルム	-	-	-	-	-	-
	公園(オブジェ)	-	-	-	1	-	1(2%)
小計	3	3	2	1	1	10(17%)	
動体物	生物	-	-	-	-	-	-
	人物	1	-	-	-	-	1(2%)
	落下傘	-	-	-	1	-	1(2%)
小計	1	-	-	1	-	2(3%)	
社会基盤	駅・電車	1	1	1	-	-	3(5%)
	道路・歩道橋	1	-	-	-	1	2(3%)
小計	2	1	1	-	1	5(8%)	
文化/教育施設	諏訪神社	-	2	-	-	-	2(3%)
	学校	-	-	-	-	-	-
小計	-	2	-	-	-	2(3%)	
その他	4	1	-	-	-	5(8%)	
合計	12	12	12	12	12	60(100%)	



[凡例] □：本文記載事項、●：空模様、●：自然、●：市街地、●：動体物、●：社会基盤、●：文化教育、●：その他、□：代表写真の撮影地



写真 13 2024 年最優秀作品

写真 14 優秀作品 写真 15 優秀作品